

鹿児島方言の疑問文音調について

—— 動詞述語文のアクセントと韻律の関係 ——

太 田 一 郎

【キーワード】 文末音調, イントネーション, 韻律変異, アクセント, 韻律への制約

【要 旨】

鹿児島方言の新しい疑問文イントネーションと言われる昇降調が広がっているかどうかを音声聴取実験によって検証した。その結果、A型動詞述語文では上昇音調を、B型動詞述語文では昇降音調をとる傾向があり、真偽疑問文の文末音調は述語のアクセントとの関連で決まる性質を持つことが示唆された。また、疑問詞疑問文ではA型述語文、B型述語文の両方で上昇音調が好まれることが分かった。最後に、これらの結果から疑問文の文末音調出力への制約というより一般的な形での記述が可能であることを示した。

1. はじめに

日本語の文音調の研究は標準変種に関する研究が多数を占め、地域方言の文音調のシステマティックな研究はそれほど行われていないようである。いわゆる尻上がりイントネーションや半疑問イントネーションなど若年層の音声現象の全国的伝播という観点からの研究も興味深いが、地域方言の文音調体系の中でこれらの音調がどのように位置づけられるのかという問題を考えなければ、単なる共通語化・東京方言化のひとつとして片づけられてしまう危険性がある。また、文音調の体系的研究が行われなければ、韻律面での変異が言語的・社会的にどのような意味を持つのかを議論することもむずかしくなる。そこで本稿

は、若年層の鹿児島方言話者たちが使用されている疑問文の「昇降調」(木部・久見木1993, 木部2000)を手がかりに、若年層方言の疑問文に見られる文末音調の型を決める要因について、音声聴取実験の結果から考えてみたい。なお、本稿では文末詞なしの疑問文のみを考察の対象とし、文末詞付き疑問文の音調については言及しない。

2. 鹿児島方言の疑問文の音調

2.1. 先行研究：昇降調の広がり

木部(2000)によれば、老年層の鹿児島方言では、疑問文は文末詞ナ、ヤ、カをつけて下降音調で、ケをつけた場合は上昇音調で発音されるのが普通だと言われている。¹⁾ しかしながら、若年層方言では、これらの在来文末詞はほぼ消滅し、ケ以外の文末詞が疑問文で使われることはなくなった。ただし、若年層方言の特徴は、ケだけが疑問文で使用されるということだけではなく、たとえば(1)のように、文末のケの部分で音調が上昇して下降する昇降型の音調が用いられる音声的特色も見られる。木部はこの音調を「昇降調」と呼んでいるが、くわえてこの音調が(2)のノダ疑問文や(3)の文末詞のない疑問文(以下ゼロ文末詞文)でも用いられる例があることから、上昇、下降に次ぐ第3のイントネーションとして認める必要があると主張する。

(1) アシ[タ]ヤス[ミ[ケ]ー

(2) [モー]シゴ[ト]ワスン[ダ[ノ]ー

(3) [モー]シゴ[ト]ワスン[ダ]ー (木部2000:110-1)

([は音調の上昇を,] は下降を表す。)

2.2. 問題の所在

若年層の談話を聞いていると、たしかにケ付きやノ付きの場合には、上がって下がる音調が共起する場合が多いという印象を受ける。鹿児島方言は、音韻論的にはアクセント付与の領域内(たとえば「名詞+格助詞」など)の最終音

節から二番目の音節が高くなる A 型と最終音節が高くなる B 型の二つのアクセント型を持つと言われるが、木部の言うように、もし昇降型音調が第3のイントネーションとして確立し、ゼロ文末詞文にまで広がっているのであれば、述語の品詞やアクセントの型に関わりなく文末にかぶさる音調として広がっている様子が観察されねばならないはずである。しかしながら、木部は若年層話者が昇降型の音調をゼロ文末詞文でも使用すると述べるにとどまっており、昇降音調の使用がどのように広がっているかについては明らかでない。この音調に関する論考は木部・久見木（1993）が初出だが、最初の報告からほぼ十年が経過しようとしている今、若年層の間にどのように広がりを見せているかという問題は興味深い。そこで本研究は、当初若い世代を中心に昇降音調の広がり現状をとらえることを目的としていた。ところが予備調査の段階で、実はゼロ文末詞文で昇降音調が使いにくい場合があることがわかった。述語部分のアクセントがA型の場合である。

3. 調 査

3.1. 予備調査

予備調査では、当初「見る」（B型）、「する」（A型）、「作る」（B型）、「歌う」（A型）の4つの動詞を、それぞれ現在形、過去形、可能現在形、可能過去形の4種類の活用形にして「何か ____（たとえば、「何か見る」）」という真偽疑問文を作り、大学生の鹿児島方言話者8名（男性4名、女性4名）に数回読ませて録音し、昇降型音調の音声特徴を記述しようと考えていた。²⁾ 筆者はA型アクセント動詞の述語疑問文（以下A型文）もB型アクセント動詞の述語疑問文（以下B型文）のどちらでも昇降音調が現れるのを期待していたのだが、B型文では昇降音調は問題なく使われるのに対して、8名全員がA型を昇降音調で発音することに抵抗があると答えた。それぞれの音調の典型的形状は図1、2に示すとおりである。図1ではA型述語「食べる」の「べ」にアクセントがあるためこの部分のピッチが高まり、その後下降して文末で再び上昇する。図2のB型文では「つくる」のアクセントがある最終音節「る」

に上昇して下降する音調が見られる。

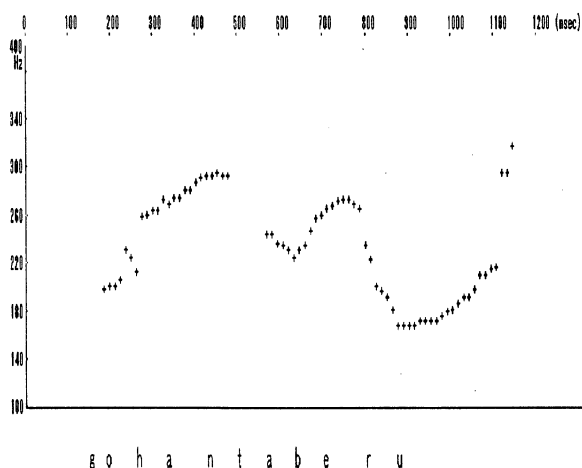


図1 A型文「ごはん食べる」の音調

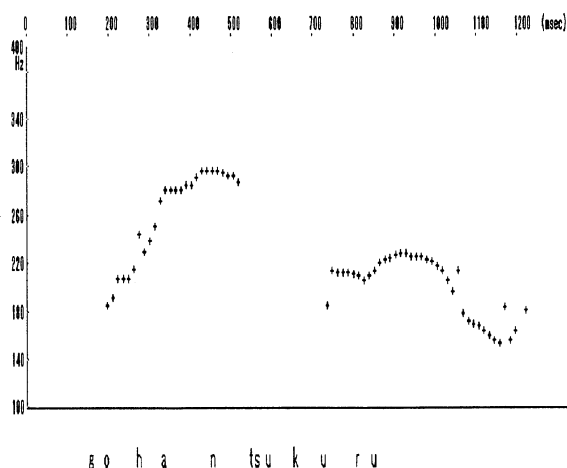


図2 B型文「ごはん作る」の音調

3.2. 仮説：音調とアクセントのかかわり

予備調査の結果からは、これらの二つの音調が鹿児島方言の疑問文音調の基本形ではないかと考えられる。つまり、ゼロ文末詞文の昇降音調はケの音調が広がったものではなく、「昇降調」とよく似た（もしくは同じ）形状がB型文に現れるのではないかとということである。ここから、若年層鹿児島方言の疑問文では述語のアクセントが文末音調の決定に大きな力を持つのではないかとという仮説を立てることができる。一方、木部が言うように、昇降音調がゼロ文末詞文にも広がっているとすれば、上昇音調をとまなうはずのA型述語の疑問文でも昇降音調の使用が認められることが予想され、この仮説は棄却される。

昇降音調をとるということにはもう少し説明を加える必要がある。図1, 2を見ると、文末の音調は述語部分（本稿の場合は動詞）のA型B型いずれかのアクセントのあとに表示されることがわかる。この場合は上昇と昇降の二つの音調しか図示していないが、理論的には図3のような5つの音調パターンが可能だと思われる。しかしながら、実際に可能なのはa（A型音調）とb（B型音調）だけのようなのである。cとdは一度高い／低いところに上がった／下がった音調をさらに下げる／上げるという複雑な動きが要求されるし、このような音調は耳にすることがないのでたぶん使われないものと思われる。同じくeの場合もすでに上がっている音調をさらに上げるのは、強い驚きの表出など別の

理由がある場合には起こりうるかもしれないが、真偽の判定を求めるのに疑問文を用いる「無標の」状況ではあまり使用されそうにない。つまり、昇降型の音調をとるということは、A型文も述語のアクセントを含めてB型音調になることを意味する (cf. 6節)。

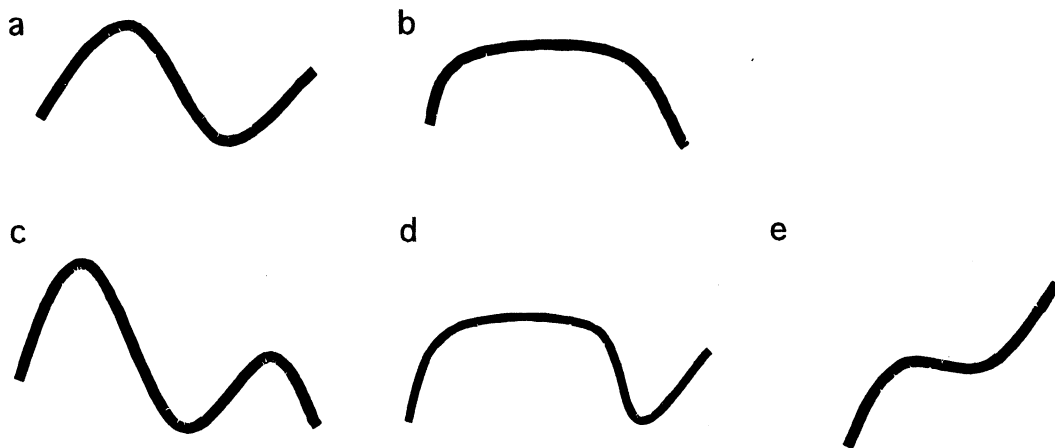


図3 可能な文末音調パターン

ただし、そのために本稿の議論が文末音調ではなくアクセントの問題を取り扱っているということにはならない。この問題はむしろ、文全体の韻律を決定するのに、アクセントが優先されるかそれともイントネーションが優先されるかという議論へとつながるものととらえることができる (cf. 杉藤1997)。つまり、音声的に独立した型として昇降音調を認めるのであれば、文末直前の述語のアクセントは犠牲になることもありうるかもしれない。そうすると、本来図3 aの音調のA型文が、図3 bの音調になるはずである。もしそうでなければ、述語のアクセントが文末音調の決定に関与するという見方が可能になる。これらの点を検証するために、実験音声の聴取による5種類のテストを行ったが、本稿ではそのうちの4つの結果をもとに考察を行う。

4. 大学生調査 (02年)

4.1. 調査の概要

調査は2002年1月、鹿児島市内の二つの大学の学生196名に対して、二回に分けて行った。今回の報告は、196名中一回しか調査に参加しなかった者、鹿

児島県以外の出身者および鹿児島県の離島出身者をのぞく117名のデータを使った。被験者の性別および出身地別の人数は表1のとおり。

調査は、録音された実験用音声を聞かせて被験者に判断を求めるという音声アンケート方式による。調査項目は動詞述語疑問文の音調である。述語になりうるものとしては他にも形容詞や名詞があるが、今回は動詞のみを調査した。動詞は平山（1960）の鹿児島方言アクセントの記述をもとに、A型B型それぞれ二音節、三音節語を選び、さらに現在形と過去形を混ぜて提示した。アクセント型、音節長、時制などの要素が文末音調の決定に関与する可能性がある

表1 被験者の性別・出身地別人数

	鹿児島市出身	鹿児島県出身	合計
男性	22	33	55
女性	31	31	62
合計	53	64	117

表2 テストAの結果

再生順	文	平山型*	平山型の選択率	再生順	文	平山型*	平山型の選択率
24	服着た	A	70.94	6	料理運ぶ	A	87.18
35	ゴミ捨てる	A	71.79	13	髪切る	B	87.18
11	雑誌読む	B	73.50	17	免許取る	B	87.18
8	薬つける	B	74.36	18	荷物運んだ	A	87.18
4	英語習う	B	75.21	32	漢字書いた	B	87.18
15	水汲んだ	A	76.07	38	たばこ吸った	A	88.03
10	何か頼んだ	B	76.92	12	着物着る	A	88.89
19	テレビ見る	B	76.92	5	車乗る	A	89.74
31	ミルク飲む	B	76.92	36	絵の具塗る	A	89.74
33	お湯わかした	A	76.92	23	髪染める	A	90.60
21	料理作る	B	80.34	22	ラジオ聞く	A	91.45
1	牛乳飲んだ	B	81.20	25	ごはん作った	B	91.45
28	財布落とした	B	82.05	26	車借りる	A	93.16
7	学校来る	B	82.91	16	休み取った	B	94.02
14	ごはん食べる	A	83.76	20	学校行く	A	94.02
34	前髪切る	B	83.76	3	おなか空いた	A	94.87
30	雑誌見た	B	84.62	27	勉強する	A	94.87
2	お金借りた	A	86.32	29	雨止んだ	A	94.87
9	ごはん食べた	A	86.32	37	何か歌った	A	97.44

(*平山（1960）に掲載されているアクセント型。以下「平山型」と呼ぶ。)

かもしれないと考えたからである。また、方言は口語的な言語使用なので、文の形で実験用音声提示される場合には（つまり後述のテストCをのぞいて）、すべて格助詞を省略した。調査に際しては、提示される文は疑問文であること、述語の末尾（文末と一致する）の音調に注意して判断すること、家族や友人とふだん使う言い方であると考えて答えること、などの点にあらためて注意を促し、回答を求めた。

4.2. テストA

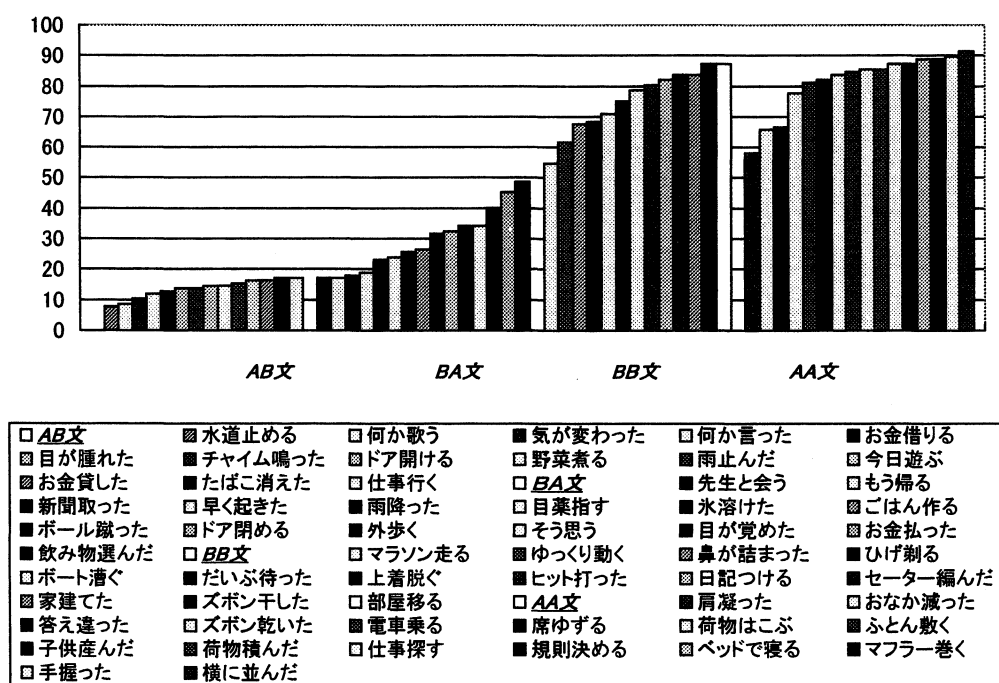
実験用音声は、前部要素が名詞（目的格、主格、場所格）のみ、後部要素（述語部分）は動詞の、NP+VPの構造を持つ文である。このテストでは、文末音調を含む動詞述語部分が図3a（A型音調）、b（B型音調）の両方で発音された疑問文を聞かせ、上昇音調と昇降音調のどちらが自分がふだん使うものに近いかを判断させた。もし昇降音調が広がっているのなら、A型述語でも昇降音調が選ばれるものがあるはずである。実験文はA型音調が先に読まれ、B型音調が後にくるものと、その逆の順序のものを作り、再生順をランダムにならべかえた。³⁾ 表2はその結果である。表の「平山型の選択率」とは、平山に掲載されている動詞のアクセント型と同じもの（たとえば「着た」ならA型）が選ばれた割合を意味する。

この数字を見ると、選択率がもっとも低いものの二つはA型文だが、全体的にはB型文の方が判断の分かれる度合いが大きい（すなわち平山型と違うものを選ぶ者が多い）ことが分かる。t検定ではアクセント型のみで有意差が見られ（ $p<0.05$ ）、音節数と時制では有意差は見られなかった。もし木部の言うように昇降音調が広がっているとすれば、A型文がB型音調で発音される傾向が見られるはずだが、A型文A型音調の選択率が平均87.5%、またB型文B型音調は82.1%で、むしろそれぞれの語アクセントと音調は平山型と同じものが選ばれる傾向にあると言える。

4.3. テスト B

テスト B では、被験者に A 型音調、B 型音調のいずれかで発音した疑問文を一回だけ聞かせ、それが自分がふだん使うものと「同じ、もしくは近い」か「違う」かの強制判定を求めた。つまり、テスト A と異なり、被験者は比較するものなしに回答せねばならないということである。実験文の音調は、A 型文を A 型音調で発音したもの (AA 文)、B 型文を B 型音調で発音したもの (BB 文)、B 型文を A 型音調で発音したもの (BA 文)、A 型文を B 型音調で発音したもの (AB 文) の 4 種類を用意した。このうち AB 文がこのテストの焦点である。なぜなら、A 型文が B 型音調で発音されるものが多数あれば、昇降音調が広がっていることの証拠となるからである。

また、このテストでも実験文の文型は基本的に NP+VP だが、文の前部要素には名詞の他に副詞を入れたものもある。名詞だけに限ると、学生被験者用の実験文を作りやすい動詞の数が制限されてしまい、テスト A と異なる語彙が選びにくくなるためである。実験文ごとの結果の平均値は表 3 のとおり。調査項目は凡例の上部左から右へとならべてある。以下の表もならべ方はすべて同じである。



グラフ 1 音読された文の音調別選択率 (テスト B)

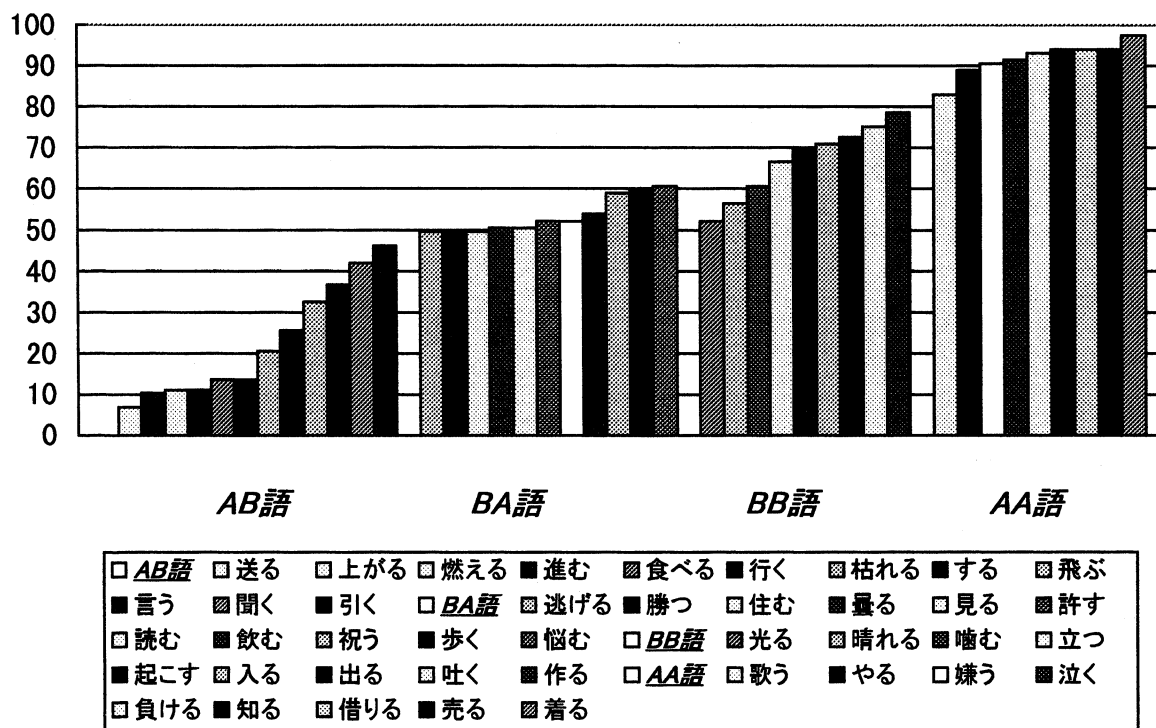
グラフ 1 を見ると昇降音調の広がりを示す証拠となるべき AB 文が選ばれる率は平均13.6%と一番低く、ついで BA 文, BB 文, AA 文の順で高くなる。つまり, テスト A の結果とくらべると回答全体のばらつきは大きいものの, 音調を入れ替えた文は選択されにくい傾向にある。しかも昇降音調の AB 文がもっとも選ばれにくいという結果になった。⁴⁾ くらべて平山に掲載されたアクセント型と同じものが選ばれたかどうかを見ると, B 型文 (平均73.0%) の方が被験者の判断のゆれが大きく, A 型文 (平均83.8%) の方が安定していることがわかる。t 検定の結果, その差は有意であり ($p<0.01$), 昇降音調より上昇音調の方が好まれていると言える。また, 音調を入れ替えた AB 文と BA 文をくらべると, BA 文の方が AB 文よりも平山型に一致しない度合いが高く, その差は有意な傾向にあった ($p<0.1$)。つまり, BA 文の方が「使うものに近い」と判断されやすいということである。これらの点から, このテストでも昇降音調のゼロ文末詞文への広がりを示す証拠は得られなかった。

表 3 実験文タイプ別選択率の平均値 (テストB)

実験文の タイプ	AB	BA	BB	AA
平均値	13.6	29.1	75.5	81.5

4.4. テスト C

平山型の高い選択率が得られたテスト A, B の結果からは, 昇降音調の広がりではなく, むしろ文末音調は述語のアクセントと関連がある可能性が示唆されていると思われる。しかしながら, 平山型は40年以上前のものであり, 被験者たちの間で平山型が今でも維持されているかどうかはわからない。また上述の二つのテストで得られた結果は, 文末音調をともなった文の聴取実験によるものであり, 述語のアクセントそのものを調べたものではないので, アクセントと文末音調の間にほんとうに関連があるかどうかを判断するのはむずかしい。もし述語のアクセントが平山型ではないのに文末音調に上昇音調や昇降音調が使い分けられるという一定の傾向が見られるとすれば, 語アクセント以外に音



グラフ2 音読された語のアクセント型の選択率（テストC）

調を決定する要因を探さねばならないことになる。そこで、被験者たちがアクセントに対して適切な判断を下すことができるかどうか確かめるためにテストCを行った。

このテストでは、A型もしくはB型のどちらか一方のアクセントで発音した語（動詞）を一回だけ聞かせ、それが自分がふだん使うものと「同じ、もしくは近い」か「違う」かの強制判定を求めた。実験用音声のアクセント型はテストBと同じく、平山型とアクセント入れ替え型を用意した。型は全部で、A型をB型で読んだAB語、B型をA型で読んだBA語、および平山型のBB語、AA語の4種類である。

まずAB語はテストB同様選ばれる率がもっとも低い（平均22.5%）。次に低いのは、これもテストBと同じくBA語だが、テストBにくらべ選択率の平均が53.4%とかなり高くなっている。これは、一見進行中のアクセント変化に見えるかもしれないが、実は別の理由があると思われる。たとえば、AB語で選択率の高いものは「聞く」や「引く」であり、これはB型で発音すれば共通語アクセントと同じピッチパターン（たとえば、「キ[ク]」のように）を持

つことになる。BA語はすべてA型アクセントで読めば、起伏式の共通語アクセントと同じになる。AB語及びBA語中共通語型と同じアクセント型になる17語の平均選択率が46.1%なのに対して、共通語型と異なる6語は12.3%であり、明らかな差がある（ノン・パラメトリック検定で $p < 0.01$ ）。つまり、アクセント型を入れ替えた方がテストBより高率になるのは、共通語アクセントからの類推によるものではないかと疑われる。⁵⁾

一方、BB語の選択率（平均67.0%）があまり高くないのは、B型が方言的に聞こえるという言語意識も原因なのかもしれない。もちろんBB語で選択率が低い「光る」や「晴れる」などのいくつかの語は、アクセント型が変化している可能性もある。また、AA型アクセントはここでももっとも安定している。平山型が選ばれた率を見ると、音節数では差が見られなかったが、アクセント型別では有意差が検出された（平均値はA型語が77.5%、B型語が46.6%。 $p < 0.01$ ）。

表4 実験語別選択率の平均値（テストC）

実験文の タイプ	AB	BA	BB	AA
平均値	22.5	53.4	67.0	91.8

このように、テストCには語形の選択自体に問題があり、そのことが回答のばらつきをテストBよりさらに大きくしているものと考えられるが、一方で選ばれたアクセント型の順序はテストBと同じであり、全般的にはテストBと同じ傾向が見られると言えるのではないかと思われる。ということは、被験者たちは平山型のアクセントを基本的には維持しており、アクセントもテストA、Bでの判定に利用されている可能性がある。すなわち、アクセントと文末音調の選択に関連がある可能性は捨てきれないと言えることになる。

結局これら三つのテストからは、「昇降調の広がり」を支持する結果は得られず、3.2で示した本稿の仮説が一応支持されたと言えるだろう。

4.5. 疑問詞疑問文の音調：テスト D

テスト A, B の実験文は真偽疑問文だけだったが、疑問詞疑問文では昇降音調が使われる可能性もあるので、疑問詞疑問文の音調も調べた。質問の形式はテスト A と同じで、上昇音調と昇降音調の両方で発音した一对の疑問文を聞かせ、どちらの音調が自分がふだん使うものに近いかを強制的に判断させた。文は上昇音調が先で昇降音調が後のものとその逆順のものを作り、各対の再生順をランダムにならべかえた。実験用音声は疑問詞疑問文だけでなく真偽疑問文も含んだ34の文からなる。

ただし、このテストの疑問詞疑問文の音調は、実はテスト A, B の真偽疑問文とは大きく異なる。たとえば A 型動詞「食べる」を述語に持つ「ごはん食べる」と「どれ食べる」では、図 1 の真偽疑問文では「食べる」の「べ」にアクセントがあるのがはっきりわかるが、図 4 の疑問詞疑問文ではアクセントはほとんどわからない。しかも、2 人の実験用音声資料提供者は、述語部分にむりやりアクセントをつける発音は不自然だと答えた。そこでテスト D では、述語部分に明確なアクセントのない音声を上昇音調の刺激音声として用い、昇降音調は B 型文と同様に述語にアクセントをつけたままで聞かせた。前者を WHU、後者を WHRF と呼ぶことにする。結果はグラフ 3 のとおりである（真偽疑問文の結果はテスト A と大差ないので省略した）。

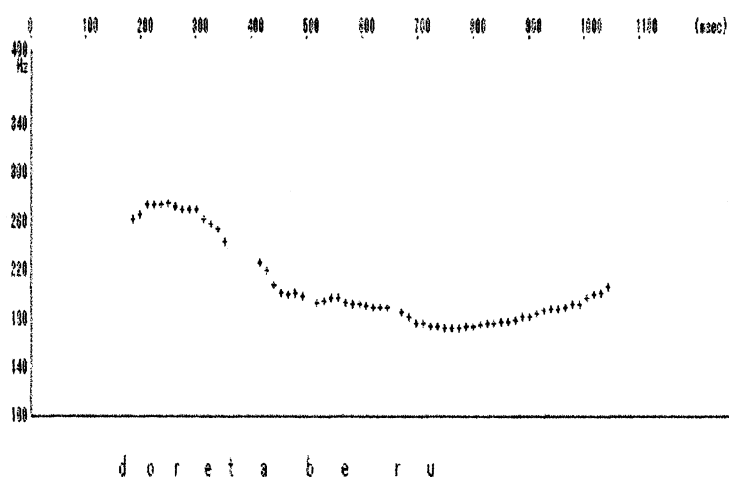
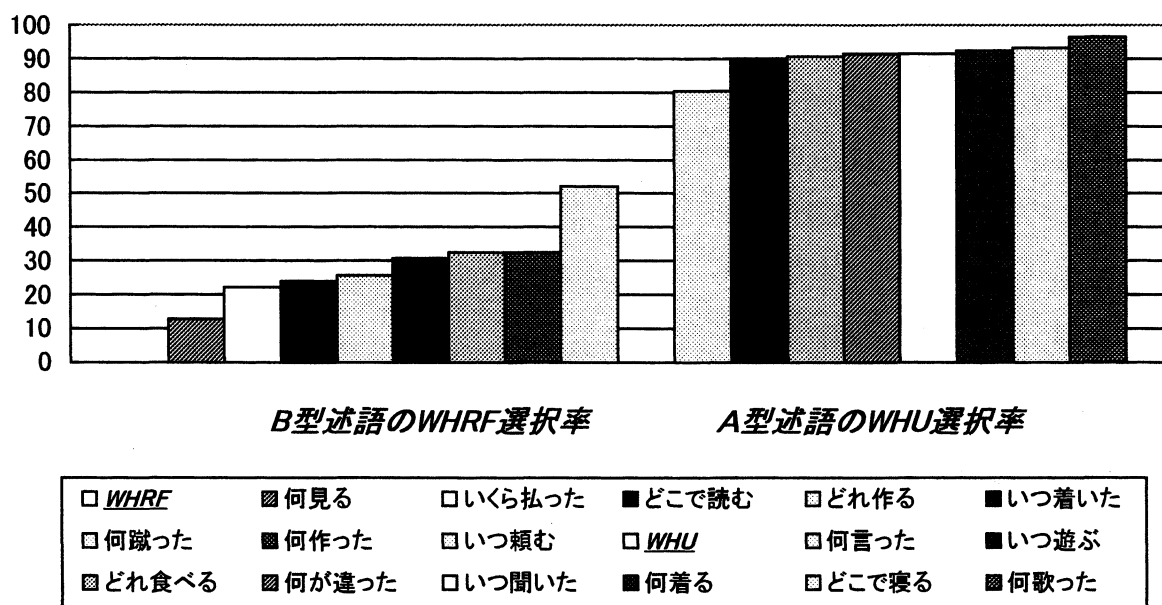


図 4 疑問詞上昇音調疑問文 (WHU)「どれ食べる」の音調

A 型述語については、音声資料提供者の意見からほぼ予測されたとおり、

語アクセントのない WHU が好まれることがわかる。注目すべきは WHRF の場合である。テストの結果からは、B 型述語での WHRF の平均選択率は約30%と低い。B 型真偽疑問文 YNB では昇降音調の方が選ばれる傾向にあるにもかかわらず、WHRF の方はむしろ避けられているようである。つまり、B 型述語であっても WHU 型の音調が好まれる傾向にあるということになる（B 型述語の WHU 選択率は70.9%）。この結果から、疑問詞疑問文の音調は、前川（1997a）が言及している東京方言の場合と同じく、鹿児島方言でも疑問詞の部分に高いピークがおかれる一方で述語部分のピークがはっきりしない音調が優勢だと考えられる。ここでもまた「昇降調」の広がりへの支持は得られないことになる。



グラフ3 疑問詞疑問文における上昇音調と昇降音調の選択率（テストD）

表6 WHUの選択率平均値（テストD）

述語の アクセント型	A 型	B 型
平均値	90.7	70.9

このような結果は上昇音調が共通語的に感じられることに起因するとも考えられるが、ことはそう簡単ではない。というのも、疑問文の韻律が共通語的に聞こえるかどうかをたずねたテストでは、共通語とほぼ同じ韻律になる図4の

「どれ食べる」は方言と感じる者が約52%, 共通語と感じる者が約41%と, 共通語的韻律が十分に判断できているとは言いがたい。⁶⁾ また, 11つの文で聞かせた WHU の平均値は, 方言51.5%, 共通語40.9%と上昇音調でも方言と感じる度合いは決して低くない。⁷⁾ つまり, 被験者たちは音調に対する意識からというよりも, 音調そのものを判断の対象として回答していると考えられる。

5. 文末音調への制約

これまで述べてきたテストの結果から, 少なくとも昇降型音調のゼロ文末詞文への広がりを示す有力な証拠は見つからなかったが, 鹿児島方言の疑問文の音調についてはいくつか興味深い事実がわかった。アクセントとの関連という点からは, 鹿児島方言の疑問文の音調は(4)のように記述できる。

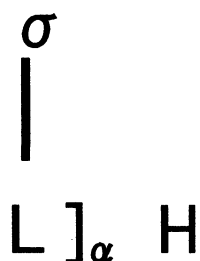
(4) 鹿児島方言の疑問文の音調

- a. 真偽疑問文は述語（動詞）のアクセントにより, 文末に現れる音調が決まる傾向がある。すなわち, A 型述語の場合は上昇音調を, B 型述語の場合は昇降音調を取ることが多い。
- b. 疑問詞疑問文は述語（動詞）のアクセントと関係なく, 上昇音調を取る傾向にある。その際, 述語部分のアクセントは目立たないことが多い。

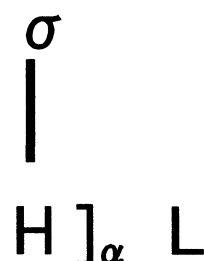
この記述では, アクセントとの関係では真偽疑問文と疑問詞疑問文は違いがあるものとして取り扱われているが, Pierrehumbert and Beckman (1988, 以下 P & B) が示す H トーン (high tone) と L トーン (low tone) を使った韻律の構造を仮定すれば, 図 5 のようにまとめて記述することが可能になる。すなわち, A 型文と WHU はアクセント句 α 内の最終トーンが L, その外側のトーンが H の図 5 a の韻律として, B 型文は α 内の最終トーンが H, そのすぐ外側のトーンが L の図 5 b の韻律として記述される。 α の右にあるトーンは文末音調のトーンを意味する。

こうして見ると, a, b それぞれの構造はさらに一般化が可能である。すな

a. 上昇音調



b. 下降音調



α = accentual phrase σ = syllable

図5 鹿児島方言疑問文とトーン構造

わち、 α 内のトーンとすぐ右側のトーンは同じトーンが挿入されることはないのである。これを文末音調への制約として表したものが図6である。通常最上部の ut (utterance) は文末のトーンを挿入するが、この制約は最終アクセント句内の最終音節に結びつけられたトーン X と同じトーン X が α 境界のすぐ右側に挿入されるのを妨げる。具体的には、H トーンのすぐ後に H トーンが挿入される、もしくは L トーンのすぐ後に L トーンが挿入されることは、この制約から鹿児島方言の疑問文では避けられることになる。そのため、結果として上昇や昇降といった形状の韻律が最終的に派生されると考えられる。また、この制約は、WHU の韻律も説明できる。A 型述語の WHU は、最終アクセント句の最終トーンは L なので、ut が挿入するトーンが H であっても何ら問題はない。一方 B 型述語の WHU は、最終アクセント句の最終トーンが H になるので一見この制約に違反しそうだが、図4で示したように、述語の語アクセントは A 型でも B 型でも極端に弱化（もしくは消失）してしまうため文末トーンが H であってもこの制約への違反とはならないものと思われる。

この考え方では、A 型述語にしる B 型述語にしる、音韻論的には WHU では述語のアクセントが削除されるものと考えられるが、このような取り扱いが妥当であるかどうかはアクセント句のトーン構造を含めた文全体のトーン構造や、トーンの音節への連結などの問題も含めて検討して答えを出さねばならな

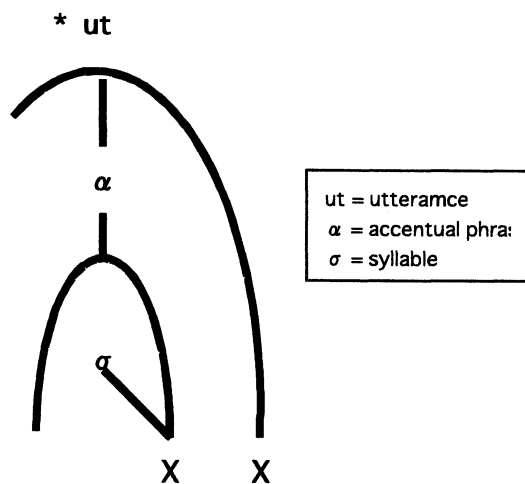


図6 文末音調の制約

い。また、前川（1997a）は疑問詞疑問文でも話者が述語動詞のアクセントを実現させようとする傾向があることを指摘しており、このことが述語アクセントの削除と相容れるものかどうか音韻論的に十分に検討する必要がある。これらの問題は残されているが、トーンによる韻律構造の記述によって、鹿児島方言の疑問文の文末音調は真偽文も疑問詞文も同様に取り扱うことが可能になる。

6. まとめと今後の課題

これまでの議論で以下の点を明らかにした。

- ・鹿児島方言では、真偽疑問文の音調は述語部分のアクセントにより決定される傾向が強い。すなわち、A型文では上昇音調、B型文では昇降音調をとる傾向にある。
- ・A型文では昇降音調は避けられることから、木部（2000）などの「昇降調の広がり」は見られない。
- ・疑問詞疑問文では上昇音調が好まれる。その際、述語部分のアクセントはほとんど目立たない（音韻論的には削除され则认为することもできる）。
- ・疑問文の音調は文末音調への制約という形で記述が可能である。

P & B が提示したトーン構造の記述を用いれば、真偽疑問文と疑問詞疑問文の両方が一種類の音調への制約という形で提示できる。ただし、今回は動詞述語文だけを分析したが、名詞述語、形容詞述語の場合にも同じ制約が課せられるかどうかは今後の検証を待たねばならない。

これまでの考察の結果からは、A 型文では昇降音調は避けられることから、ゼロ文末詞文への「昇降調の広がり」を裏付けることはできなかったわけだが、そのことがすぐに本部らの説を棄却することにもならない。というのも、文末詞付きの疑問文ではたしかに「昇降調」が聞かれることが多いからである。ただし、「昇降調」はケやノの付いた疑問文だけではなく、平叙文に付く文末詞ヨとも共起するので、文末詞付き疑問文についてはこの点も含めた上での考察が必要になる。⁹⁾ さらに、文末音調の機能面は本稿の考察の対象外であり、疑問文の具体的な運用についてはまったく検討していない。語用論的要因から A 型文でも昇降音調が用いられる場合がある可能性は残されている。

くわえて、図 3 の音調 e は標準語スタイルでは使用される可能性も排除できない。今回の調査では実験音声に含めなかったが、その理由は今回の焦点が昇降音調にあったからである。回答の傾向から判断すると、結果的には B 型アクセントと昇降型の音調にはかかわりがあると考えられるだろうが、音調 e については検証していないのも事実である。スピーチスタイルとの関連も含め、今後の課題としたい。

また、今回の分析では被験者の属性と音調・アクセントの関わりについての社会言語学的考察をまったく行わなかったわけではない。若年層話者だけが被験者だったので社会変数については多くを調べたわけではないが、居住歴や親の言語変種との関わりなどに興味ある結果が見られるようである。この点については別の機会にあらためて考察したい。

【謝 辞】

本研究は、科学研究費補助金基盤研究 (B) (1) 「日本語諸方言に見られる

中間言語的変異の研究 ―言語変異理論の立場から― (代表：太田一郎)，および科学研究費補助金基盤研究 (B) (1) 「現代日本語の音声・語彙・意味・文法・談話における変異と日本語教育」 (代表：日比谷潤子) のサポートを受けています。本稿は後者の最終報告書に掲載した原稿に加筆訂正を施したものです。

また、調査には以下の方々にご協力いただきました。御礼申し上げます。

馬込紀子，塩屋真紀，田中徹也，知覧泰治，笹原耕平，大道義貴，宮内美保，前田知賀子，鎌ヶ迫佳代，稲森梢，津曲沙弥香

【注】

- 1) 木部 (2000) などでは「質問文」と呼ばれているが、本稿はすべて疑問文と呼ぶ。
- 2) 予備調査には実はもう 1 名女子学生が協力してくれたが、その話者は、すべての文を共通語的音調で読んだため、予備調査の結果には含めなかった。このような話者がいることも今後の社会言語学的考察の際にはひとつの論点となるかもしれない。
- 3) 以下すべてのテストで再生順は SP4WIN でランダムな順序に並べ替えた。
- 4) ゆれが生じる原因はアクセント変化のためというよりも、実験音声の質によるところもあるかもしれない。今回の実験では刺激文は合成音声ではなくすべて方言話者の生の音声を用いたため、ふだん使わない音調を発音することに話者たちが苦勞することがあった。そのため、特に音調を入れ替えた実験用音声には多少の不自然さが出ている可能性もあると思われ、それが回答に影響を与えた可能性もある。
- 5) ただしこの類推は、必ずしも共通語型アクセントを使っているという意識につながっているわけではないと思われる。第 4 節および 6) を参照のこと。また、テスト B は文単位での判定だが、C は語だけしか聞くことができない。つまり B のように前部要素があるかどうか結果に影響を与えたのかもしれない。
- 6) 方言意識度のテスト (テスト F) のこと。疑問文音調の使用意識だけでなく、方言と意識して使用しているかどうかを確かめるために行った。テスト B, C と同じく、平山型と入れ替え型のアクセントで、真偽疑問文と疑問詞疑問文を一度だけ聞かせて方言的か共通語的か、またはどちらでもないかの判定を求めた。刺激文数は 41。その結果、A 型で読まれたものが「共通語」と判断される傾向が強いことがわかった。特に B 型が A 型で読まれた場合にその傾向が顕著なようだ。逆に B 型で読まれたものは「共通語」の判定が低くなる。もっとも 4) と同じく、被験者が述語の音調だけを判断の対象にしたかどうかを明言するのは難しく、前部要素のアクセント等による影響の可能性ももちろん排除できない。

- 7) ただし, WHRF の平均が方言的50.9%, 共通語的20.7%であることを考えれば, たしかに WHU の方が共通語的と感じられる傾向はあると言える。
- 8) 前川 (1997b) の熊本方言のイントネーションモデルが参考になるが, 今回はふれないことにする。
- 9) この場合のヨは機能的には確認要求であることが多く, その点では疑問文と同じ反応要求系の音調として取り扱うことも可能なのかもしれない (cf. 太田2001)。また, 文末詞が文の他の部分と異なる音調を持つことについては, 杉藤 (2002) を参照されたい。

【参考文献】

- 太田一郎 (2001) 「鹿児島若年層話者方言のヨとガ ―ネオ方言の記述法を考える―」『人文学科論集』53 pp. 37-59. 鹿児島大学法文学部
- 木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版
- 木部暢子・久見木大介 (1993) 「鹿児島市方言の質問のイントネーションについて」『人文学科論集』38 鹿児島大学法文学部
- 杉藤美代子 (1997) 「話し言葉のアクセント・イントネーション・リズムとポーズ」杉藤美代子監修『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』pp. 3-20. 三省堂
- 杉藤美代子 (2002) 「終助詞「ね」の意味・機能とイントネーション」音声文法研究会編『文法と音声Ⅲ』pp. 3-16. くろしお出版
- 平山輝男 (1960) 『全国アクセント辞典』東京堂出版
- 前川喜久雄 (1997a) 「日本語疑問詞疑問文のイントネーション」音声文法研究会編『文法と音声』pp. 45-53. くろしお出版
- 前川喜久雄 (1997b) 「アクセントとイントネーション―アクセントのない地域―」杉藤美代子監修『諸方言のアクセントとイントネーション』pp. 97-122. 三省堂
- Pierrehumbert, J.B. and Beckman, M.E. (1988) Japanese Tone Structure. Cambridge, MA. MIT Press.